

遊歩者たちのパリ 「都市」をふたたび 考えなおすために

『パリ大全 パリを創った人々・パリ
が創った人々』（エリック・アザン著）



村澤真保呂

旅行であれ出張であれ、あるいは移住であれ、パリで数日も過ごした経験がある人は、パリの街路をあてもなく散歩した経験があるだろう。あるいはメトロの駅を出て、地図をみながら途方にくれた覚えがあるだろう。そのような人々が本書を読めば、自分がなにも知らずに通り過ぎた場所に、どれほどの物語が詰め込まれているのかを知って、ふたたび訪れたくなるに違いない。

著者のエリック・アザンは、エドワード・サイードの著作の仏語版をはじめ、左派系の本を出していることで知られる出版

社「ラ・ファブリック」の社長である。原著は二〇〇二年、著者が六〇代半ばで執筆した「デビュー作」であるが、刊行した直後から大きな話題を呼び、国内外で高い評価を受けている。

本書の特徴は、パリの歴史と街区の変容について、それぞれの時代ごとに民衆の視点から、というよりパリを歩いた人々の視点から説き起こした点にある。「デイドロやカミーユ・デムラン、ブランク、ポードレル、ブルースト……」著者は、パリの街路を通り過ぎた無数の人々の足跡と記録を追いかけながら、当時の人々の目に映った

パリの出来事を示しつつ、その背景にある文化・社会・政治的な変化をわかりやすく解き明かす。その語り口は、あたかも著者アザン自身がパリの精霊になって、パリの街路をさまよいつながり、過ぎ去りし日の人々の思い出を語っているかのようなのである。著者は、パリで生まれた各時代の文学、芸術、建築、音楽といったさまざまな文化現象が、その時代のパリという町のあり方からどのように生まれてきたのか、逆に文化や政治のあり方がどのように町のつくりを変えてきたのかを説得力をもって明らかにしてくれる。

たとえば「孤独な散歩者」のルソーがみたパリの貧困地域の売春婦は、時代を下るにつれて各地で売春宿へと組織化されていき、しだいに夜の世界の「網の目」が町全体に張り巡らされていく様子がつぶさに語られる。この網の目こそは後にバルザックの「人間喜劇」を成り立たせる背景になっただけでは

なく、その後ユゴーやゾラを経て、シムノンの探偵小説に不可欠な舞台になっていくことを、アザンは鮮やかな手際で示している。つまりアザンは、彼自身のパリ探求の経験と文学・芸術的領域への深い造詣によって、パリという町が人々の想像力や感受性などの主観的領域に与えた影響とその歴史を描きだすのである。

そこにこそ本書の最大の特徴があるように思われる。つまり、現在の社会科学的な歴史学では、パリという都市が芸術家や作家の感受性や想像力にもたらした影響を扱うことができない。そのような感覚的次元の問題は、文学者の仕事だからだ。他方で文学者は、芸術家の作品やテキストを論じることはできても、その外的条件である「パリ」について論じることはできない。しかしアザンは、歴史学者と文学者の限界をやすやすと飛び越え、文学的直観と社会科学の合理性を調和させる。それ

はたんに各時代の「人々の視線」からパリを論じるだけでなく、同時に「パリの視線」から人々について論じることを意味する。言い換えれば、かぎりなく「パリ」という都市にみずからを合体させること、あるいはパリという都市の声にかぎりなく耳を傾けることである。そこそはポードレルやネルヴァルをはじめとするパリの遊歩者

たちが実行したことであり、したがって著者のアザン自身もまたポードレルのような「遊歩者」の系譜に連なる作家なのである。

本書を読んでいるあいだ、私は次のような感覚にしばしば襲われた。つまり自分がパリのカフェにいて、ふと「パリ」が目の前に初老の男の姿で現れ、彼が語る自伝を聞いている、と

いう感覚である。「都市を論じた著作」は珍しくないが、本書のように「都市が論じた著作」とまで感じられる例はめずらしい。とくに現在の実証主義的社会科学が席巻する時代に読むと、逆にどれほど私たちの文学的感性が干からびてしまったかをあらためて痛感させられる。それはまた、現在の大都市が直面する課題を理解するうえで、

そのような文学的感性がどれほど重要であるかを再認識することもである。その意味で、本書をたんなるパリ案内としてではなく、新たな時代のための「都市論」として活用することがぜひとも望まれる。

「杉村昌昭訳」

以文社刊、四五〇〇円十税

「インパクション」192号

2013.11月